

「庶民の「旅」から見た江戸時代」

岡山県立総社南高等学校 秋山 亮

はじめに

- ・「旅」からみると江戸時代はどんな時代だったのか

1 江戸の庶民文化と旅

- ・出版文化の隆盛（旅日記や紀行文学・風景画）
→備前・備中の名所を紹介した出版物も刊行（司馬江漢の『画図西遊譚』など）
- ・旅のガイドブックの決定版『旅行用心集』
→旅の心得、酔い止め、害虫対策、疲労回復の方法などを分かりやすく紹介
- ・意外と自由で豊かな江戸の庶民（ただし建前は必要）
→伊勢参り・金毘羅参りなどの寺社参詣・湯治・名所めぐり
- ・茶店や宿泊所なども含めた交通システムの整備

[参考資料]『旅行用心集』(八隅蘆菴^{やすみろあん}著・文化7年刊行) 一部抜粋

○旅宿ハ定宿ハ勿論、其道筋^{はじめ}初而にて不案内ならば、成丈家作のよき賑かなる泊屋へ泊るへし。

— [大意] —

宿屋はなるべく造りが立派で、賑やかなところを選ぶこと。安い宿にはリスクが多い。決った宿（定宿）を利用するのがよい。

○道連はたかたか5、6に限るべし。大勢連ハ悪し。

— [大意] —

旅の連れは5・6人程度までにする。大勢で長旅をすると、意見の違いが必ず表面化する。また、連れに大酒飲みや持病がある人は選ばないほうがよい。

○山川の真景^{けしき}等を画に認^{したたむ}るも、其通り見たるま^{おつて}まを写し置、追而帰国の上、取立浄書すべし。

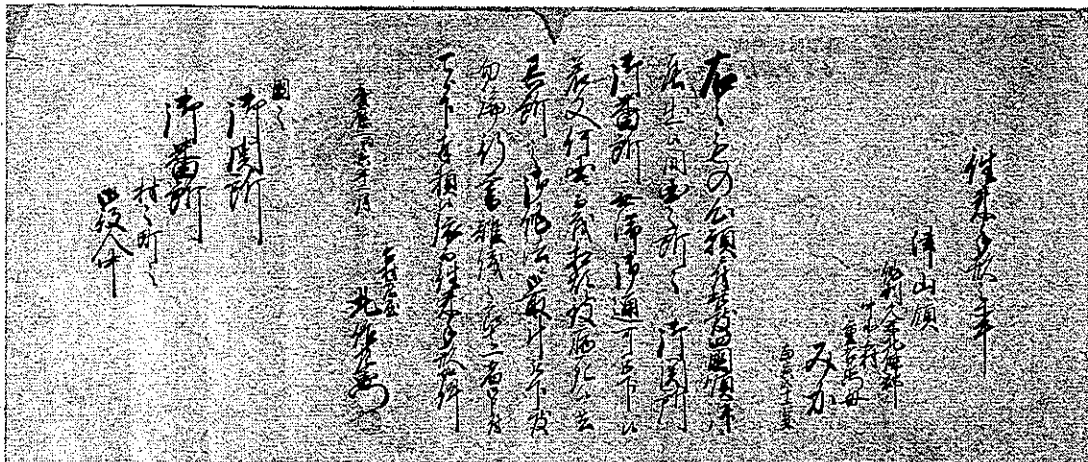
— [大意] —

道中日記を書く場合は、ありのままに日付や様子を書きつけること。清書は後日すること。旅行中に詩歌や絵を完璧にしようとする^とと続かない。

2 伊勢参りの流行

- ・伊勢に向かう道
- ・旅行代理店としての「御師」
- ・伊勢参りの「宮笥」としての伊勢暦・万金丹
- ・おかげ参りの熱気を伝えるもの（絵馬・刷り物）
- ・旅の本音は”伊勢参り 大神宮にも ちよつと寄り”

3 「パスポート」としての往来手形



(岡山県立博物館蔵高柳家文書)

往来手形之事

津山領
作州久米北条郡
中北上村
重右衛門母
みか
当寅五十六歳

右之もの心願二付、此度四国順拝二
罷出候間、国々所々御関所
御番所無滞御通可被下候、
若又何国二而茂相煩致病死候共、
其所之御作法二御取計被下度、
勿論行暮難儀之節者、一宿御申付
可被下奉頼候、依而往来手形如件、

右村庄屋
北作左衛門

慶応二丙寅年二月

国々
御関所
御番所
村々町々
御役人中

☆旅の途中で病気になった場合はどうしたのか。

→資料中の「相煩致病死候、其所之御作法二御取計被下度」に注目

→別の往来手形には「万一病死仕候得者、其處之御作法御取埋メ可被下候」と記載

☆実際、江戸の村々は見知らぬ行き倒れの旅人を助けたのか。

4 江戸の旅とその現実

①藤原家文書にある「行き倒れ」の記録より

「九番ニ而豆州那賀郡田子村吉蔵病死御注進」

〔概要〕上道郡沖新田九番東堤大川辺にて旅人が川に落ち、その後死亡した事例

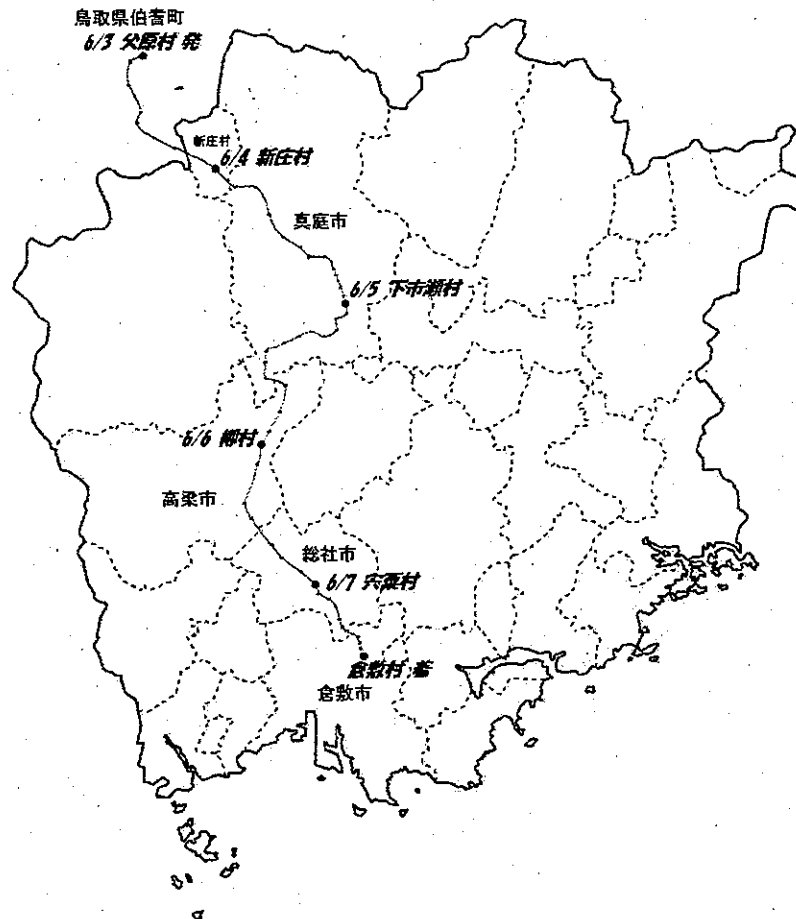
〔処置〕往来手形による身元確認・持ち物確認

〔報告〕九番名主與三太・九番五人組頭富八郎

→大庄屋三番深蔵→加藤伝兵衛・小松惣太

②小野家文書にある倉敷村槌右衛門の「村送り」の記録より

〔概要〕六十六部の槌右衛門が伯耆国で倒れ、倉敷村まで村送りされた事例



③小野家文書にある亀次郎親子の記録より

〔概要〕亀次郎が土佐国で死去し、同行の娘きよが取り残された事例

☆だれが中心となって、旅人保護（または埋葬）を実施したのか？

→村役人が往来手形や所持品の確認、事件性の有無などを速やかに藩の役人に報告

☆「病に倒れた人」を救済するシステムを構築したある法令とは？

→旅人が増加した元禄期に成立。儒学的な慈愛の精神の法制化

5 旅からみた江戸時代

- ・ 出版物の隆盛と交通システムの整備 → 旅文化の活性化
- ・ 本音と建前が共存した社会（番所関所の通過・湯治・精進落とし・踏絵・・・）
- ・ 「生類憐みの令」 → 儒学に基づく福祉政策（弱者は「犬」だけではない）
- ・ 村役人（庄屋・名主）の統治能力の高さ・均一性（近代地方政治の前提）

おわりに

～庶民の旅に関する資料からみえてくること～

- ・ 現代はやさしい時代か
- ・ 江戸時代の知恵を生かす（本音と建前の使い方、「試練の記録」の活用など）
- ・ 「歴史とは過去との対話である」（E・H・カー）

<MEMO>